
桜花幻奇伝

日月淑絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花幻奇伝

【Nコード】

N4882A

【作者名】

日月淑絵

【あらすじ】

古えの世からある桜の木。その桜に宿る精霊を愛した娘の物語。

前編

秘すれば花なり

秘せずば花なるべからずとなり

世阿弥『風姿花伝』京の都から遠く離れたある村に一人の男が住んでいた。

男の名は村岡一柊。能面を打つ事を生業としている面打師であった。彼の作る能面は気品があり、彫刻的絵画的な美を放っていた。そのため、注文客のほとんどが能楽師や能好きな公家達で、彼らは大金を持って面を作ってくれと頼みに来るのである。だが、村岡はこんな大金はいらないと言って受け取らない。

しかし、客は無理にでも置いていく。仕方なく村岡はその金を村人の病氣見舞いにと、一人娘の文音に持たせてやるのだ。

そんな大金をもらっても、二人は贅沢はしなかった。この小さな村で細々と暮らしていくのが父娘にとって最高の幸せだったのだ。その日も、村岡はいつものように仕事場で面を打っていた。

「父上、お茶が入りました」

文音が盆を持って入ってきた。

「うん、ありがとう」

村岡は手を休めて茶を飲み、文音の顔を見て次のように言った。「文音。そろそろそなたも嫁に行かねばならぬな」

「父上、わたしは父上を置いて行けません。わたしがお嫁に行ったら、誰が父上の世話をするのですか」

文音は困ったような顔で言った。

「自分のことは自分で出来るさ。そなたはわたしの仕事を心配しているのではないのか？」思わず、文音は口をつぐむ。

「心配はいらないよ。実は弟子を取ろうと思っている。こんなわたしの所に来てくれる者がいるといいのだがね」

「父上……」

村岡は黙って娘を見つめた。文音の母親は都の女で、二人は駆け落ちするようにしてこの村へやって来ると夫婦になった。

母親は文音を産むと間もなく死んだ。文音は母親似で色が白い、美しい娘だった。

村岡の所へ来る注文客の中にも、何人かの者が文音を妻にしたいという者がいた。しかし、文音の気持ちは動かなかった。

（その内、わたしが文音にふさわしい者を見つけてやろう）

村岡はまた仕事に戻った。文音は父が仕事を始めたので、たのまれていた仕立物を届けに、地主の家へ出かけた。彼女は手内職をして暮らしの生計を立てていた。

地主の妻は彼女の織った着物を見てこう言った。「いつもながら文音さんの丁寧な仕立てには感心しますよ」

「ありがとうございます」

文音は深々と頭を下げた。地主の妻から次の仕立物を受け取り、彼女は帰って行った。

妻が見送っていると奥から地主が出て来た。

「今のは、村岡さまのお嬢さんでは？」

「はい。そうですわ」

「もう嫁に行く年頃だな」

「ええ。早く良いお方が見つかるといいですわね」このように地主夫婦も文音の事を心配していたが、文音は父を一人にさせたくない思いでいっぱいだった。いや、もしかすると今まで出会った男の中に、彼女の心を動かす男はいなかったのかもしれない。だが、ついにこの日、文音に運命の出会いが巡ってきたのだ。黄昏の中、いつもの道を歩いてみると、どこからともなく笛の音が聞こえてきた。その笛の音はどこかしら、はかな気で、哀しみがこもっていた。文音はふと足を止めて笛の音に聞き入った。

（まるで胸がしめつけられるような哀しい音色だわ。いったい、誰が吹いているのかしら）

文音は笛の音に導かれるように歩き出した。笛の音は村はずれの丘から聞こえてくるようであった。丘の道を登って行くと、桜の巨木の下に一人の若者が笛を吹いていた。白い着物を着た若者は、完全な美貌の持ち主であった。ふいに、若者は笛を吹くのをやめて文音の方に顔を向けた。彼女はハツとなつてこつ言つた。「邪魔してごめんなさい。あまりにも哀しくてきれいな音色だったから…」

「いや、かまわない」

「あの、どうしてそんなに哀しい音色なのですか？」

若者は立ち上がって、山を見つめると言つた。

「わたしはもうすぐ死ぬ」

「え…？」

「娘よ、わたしはこの桜の木に宿る桜の精なのだ」

文音は言葉をなくして若者を見つめる。「何百年もの間、わたしはここで時の移り変わりを見てきた。だが、それももう見ることはない…」

若者の目は淋しげに沈んだ。

「せめて最後にこの景色を覚えておこうと、ここで笛を吹いていたのだ」文音はこの桜の精が哀れに思えた。彼女は少しでも長く生き長らえる方法はないものかと考えた。桜の精には文音の心がわかるのか、静かに笑みを浮かべて、

「無理だよ。わたしの命は下弦の月までなのだ」と、言つた。

「では、わたしが下弦の月の夜まであなたの笛を聴いてあげましょう」桜の精は驚いたように彼女を見つめた。

「そうしたら、淋しくないでしょ？」

文音は真剣だった。桜の精はフツと笑つてこつ言つた。

「優しい心を持っているのだな。名前は？」

「文音」

「文音か。良い名前だ」

「わたしは毎日、地主さまの所へ仕立物を届けに行くの。その帰り

にここへ来るわ。ではまた、明日会いましょう」文音はそう言つて歸つて行つた。

翌日から、文音は家の歸りに桜の精の笛を聴くため、丘へ通い始めた。

下弦の月の夜まであと七日あつた。桜の精は彼女が来ることを楽しみにしていた。文音も桜の精といつしよにいる時間が楽しかった。そうして、いつしか二人の心に淡い思いが芽生え始めていた。ある日、文音は桜の精の笛を虚ろな気持ちで聴いていた。桜の精は彼女のように妙なのに気付き、笛を吹くのをやめた。「どうしたのだ？元気がない」

「あなたはあと四日でいなくなってしまうのね」

「文音：」彼女の目から涙がひとしずくこぼれる。

「離れたくない」

桜の精はそつと文音を腕の中へ抱き寄せた。彼も今、文音と同じ気持ちになつていた。

「わたしもだ。このままずっと、お前といつしよにいたい」

「どうしてもつと早く会えなかつたのかしら」文音は桜の精の胸に顔を埋めてつぶやいた。

「運命のいたずらというものだろう。桜の精というこの身がうらめしい。人間の男であつたなら、お前を妻に出来たのだ」

桜の精は文音を抱く力をこめた。文音はふと目を開けた。陽が西へかたむき始めている。「もう歸らなければ」

「また明日来てくれ、文音」

「ええ。明日ね……」

文音は辛い気持ちを抱えたまま、丘をあとにした。家の前まで来ると村岡が戸口に立っていた。村岡は文音を見ると、心配そうに言つた。「お前の歸りが遅いので、迎えに行こうかと思つてたんだよ」「ごめんなさい、父上。すぐに夕餉の支度をしますわ」文音は厨へ入つて行つた。村岡は娘のようすがおかしいのに気付いていた。縫い物をしていても、何か、他のことを考え込んでいるようであつた。

問いただそうとしても何も答えてはくれないだろう。次の日、文音が出かけたあと、村岡は考え事をしながらのみを動かしていた。この日、村岡の家に見知らぬ訪問客が訪れた。「誰かおらぬか」

この声に村岡はもの思いから冷め、表の戸口へ行つた。そこには二人の男がいた。一人は金系銀系の贅沢な着物を着た公家で、もう一人は家来であるらしかった。

「そなたが面打師の村岡一柊か？」

公家が彼を見て口を開いた。

「はい。どちらさまでしょうか」「わたしは姉小路良政。京の都の者だ。そなたに面を打ってもらいたい」

「喜んでお引き受け致します」

姉小路は満足そうにうなづいた。

「小面の面を打って欲しいのだが、木はこちらで選んだもので打つてくれるか？」「はい。どのような木でしょうか」

「あれだ」

姉小路はすつと指さした。村岡が指さす方を見ると、村はずれに立つ桜であつた。

「あの桜を使うというのですか？！」

彼は思わず叫んだ。「そうだ。なかなか見事な桜よ。あれで打つた面は素晴らしい面となるに違いない」

「出来ません。どうかそれだけはお許し下さい」

「何故だ」

姉小路は眉をあげた。

「あの桜はわたし共がこの村へ来る前からある神木です。神木を切り倒したら、神の怒りにふれます」

村岡の言葉に姉小路はせせら笑った。

「下賤の者の世迷言だ。それに、あれはかなりの老木。切る前に倒れてしまうわ」

「姉小路さま・・・」

「よいか？ 必ずあの桜で面を打つのだ。それともうひとつ。そな

たには娘がいるそうだな」

村岡の顔色がさっと変わった。

「京女の血を引く美しい娘だそうだな。さっき村の者から聞いたぞ。ぜひ、その娘をわたしの妻に迎えたい」

「文音を妻に……」

そのとき、足音が聞こえて村岡は顔を上げた。文音が帰ってきたのだ。

文音は家の中にいた姉小路と目が合い、軽く会釈した。

「そなたが村岡一柝の娘、文音か？」

「はい」

姉小路は目を細めて微笑むと言った。

「なるほど。聞きしに勝る美しい娘だ。村岡、わたしはこの娘との祝言の席で能を舞いたい」

文音は一瞬耳を疑った。

「父上……」

父のほうを見るとその顔は暗く沈んでいる。

「わたしに背かぬほうがよいぞ。もし背けばどうなるわかっておるだろうな」

村岡は黙っている。姉小路は家来を従えて表へ出た。

「では、また来る。文音よ。そなたのために今度、御所車を連れて来よう」

そう言い残して姉小路は馬に乗り、去っていった。文音はしばし茫然と見送っていたが、父の傍らに近づいてこう言った。

「あの人は誰なのです。それに祝言ってどういうこと？」

「あのお方は姉小路良政さま。わたしに面を売ってくれと頼みに来た。村のはずれにある桜の木で面を打てとな。そして、お前を妻にしたいと望んでおられる」

文音の胸に衝撃が走った。彼女はくずおれるように膝をついた。

「文音……？」

「お許しください……父上。わたしは、桜の木の精を愛している

のです」

文音は今までのことを全て父に話した。村岡はしばらく何も言わなかった。泣き伏す娘の肩に、そっと手を置いた。どうすることもできない父娘の傍らを風がすーっと通り抜け、次のような声が聞こえてきた。

わたしを切って面を打つがよい

声の主は桜の精だった。

わたしはもうすぐ死ぬのだ

「いやです！ あなたを離れたくありません！」

だが、声はもうそれっきり聞こえなかった。

空の色が茜色から少しずつ紫色に変わると、いくつかの星が瞬き始める。

下弦の月の夜まで、あと三日であった。

中編

穏やかな日差しがふりそそぐ午後…。

桜の精は、小高い丘の上から回りの景色を眺めていた。空は青く澄んでひばりがさえずっている。遠くの山々は霞み、平野に目をやると農夫らしき者が野道を歩いていくのが見える。

久方の光のどけき春の日にしづなく花の散るらむ

紀友則

彼は自分の命の炎が、少しずつ弱まっていくのを感じていた。

その頃…。村岡一柊は地主の家を訪れていた。村岡は今まで起こった事を地主に話した。

「そうでしたか。あの桜で面を彫れと…」

村岡はうなづいた。

「あの桜については祖父さまから聞いた事があります。祖父さまも、そのまた祖父さまから聞いたそうです」

「古えの代から、あの桜はこの地にあった訳ですか」

「その通りです」

「もうお帰りですか」

「ええ。桜の木を見ておきたいと思ひましてな」

「村の衆にはわたしからよく話しておきましょう。皆、わかってくれるはずですよ」

「何から何まで…かたじけない」

村岡は頭を下げると地主の家をあとにした。自宅へ帰る途中、村岡は桜の古木がそびえる丘へ立ち寄った。

見れば見る程、見事な桜だった。

無数の枝に花を咲かせ、天へとのぼしている。これがもう枯れ行く桜とは思えなかった。

桜の古木に吸い寄せられるように歩み寄った村岡は、途方もなく大きな幹にそつと触れた。なかなかしつかりした幹だ。これなら、きつと立派な面が彫れるだろう。

「村岡殿……」

ふいに頭上から声がしたので、村岡は顔をあげた。古木と重なるようにして桜の精が見下ろしている。

「わたしを切る決意をして下さったか」

「ああ。そなたの幹はしっかりしている。きっと素晴らしい面が出るだろう」

村岡がそう言った時、桜の精の表情に、一瞬陰りがよぎったように見えた。

「文音はどうしている」

桜の精が切り出した。文音はここ最近、桜の精のもとへ来ていなかったのだ。

「文音は家に閉じこもって、外へ出ようとしない」

彼はそう答えた。村岡は、ぼんやりと外を眺め、時々涙を流す娘を見て不憫でたまらなかった。

「自分達を不幸だと思っているのか？」

その問いに対し、村岡は、

「いや、そうは思ってはあらぬ。人間というものは皆、宿命を持って生きているからな。そなたもだろう」

と答えた。村岡は丘の上から見える景色を見つめ、ひとりごちた。

「ここは変わらんなあ。よく亡き妻とこの丘へ来たものだ。そなたも知っているだろう」

桜の精は黙っていた。

「わたしはそろそろ失礼するよ。地主殿がそなたを切る手筈を伝えてくれるだろうから」

そう言つて村岡は丘をあとにした。桜の精はいつまでも彼を見送っていた。

家に帰ると地主が村岡を待っていた。地主は村の者達に桜を切ることを話したと言った。村人達のほとんどが反対したが、地主が訳を話すと、人々は承知したとのことだった。

公家に逆らえばどうなるか、人々は知っていたのだ。自分達に親切

にしてくれた村岡が、罰せられるのを見たくなかった。

桜を切るのは明日の朝決まったと、言って帰った。村岡は、障子の向こうで自分達の話聞いていた文音のことを考えていた。

翌朝、桜の丘に地主と村人達が集まった。村岡がやってくると人々は彼の方へ近付いてきた。彼は人々に、

「皆、本当にすまない。皆が大切に行っている桜を切ることになってしまったのは、わたしのせいだ」

と頭を下げた。

「何をおっしゃるのです。あなたはむしろが病気になったとき、助けて下さったではありませんか。むしろはあなたに恩返しをしなければならんです」

村人の一人が言った。人々の思いは皆同じだった。

「では、そろそろ」

斧を持った二人の村人が前へ進み出た。

二人は桜の根元に近付いて行っった。

そして一人が最初の一振りを幹に入れた。コーンという音がして辺りに響き渡る。巨木の桜を切るには、かなりの時間がかかった。村人達は交替で切り続けた。

太陽が真上に昇った頃、桜はようやくその身を傾け、地面に倒れたのだった。村岡は面を打つのに丁度良い部分を選んで、それを切り出してもらった。その他の部分は神主に祈祷して燃やしてしまうことにした。村岡は残った桜の根をしばらく見つめていたが、木材を大事に抱えて帰路についた。家に帰ると文音が出迎えた。

「あの方にお会いになられましたの？」

文音がそう訊いてきた。

「いや、わたしの前には現れなかったよ。それよりこれを見てごらん」

村岡は桜の木材を板敷きの上に置いた。

文音は愛しそうに手を触れて、

「父上、心おきなく面打ちに励んで下さい。わたしは、姉小路さま

のもとへまいります」

と目に涙を浮かべて言った。

「文音……」

村岡は言葉につまり、それ以上言うことが出来なかった。

「さあ、もうあまり日はない。さっそく今夜から作業にかかろう。支度をしておくれ」

「はい」

文音は奥の箆笥から白装束を出し、村岡はそれに着替えた。そして、神棚へ向かい、一心に祈りを捧げた。後ろで文音も一緒に祈った。

村岡は自分の仕事場へ入ると珍しく戸を閉めてしまった。

特に大事な仕事の時は、彼は誰も中に入れず、面打ちするのだ。

机の上に彫刻刀を並べ、自分の前に桜の木材を置いた。村岡は木槌とのみを取った。

のみを叩く音が静まり返った辺りにこだまし、面打ちが始まったのであった。

後編

姉小路がやって来る日まで二日あった。

村岡は二日で面を仕上げようと、ただひたすら一心不乱に打ち続けた。文音は身の回りの整理を終えると、神棚に向かって手を合わせ、祈った。村岡は寝食も忘れ面を打った。桜の木材は少しずつ面の形になっていく。だいたいの形になると、細かい部分を彫刻刀で彫る。まぶたや唇の細やかな部分を彫り終えると鑢で表面をすべらかになるように磨く。

次に彩色だった。大きめの刷毛に胡粉をつけ、地塗りする。唇は朱を入れ、髪は漆を塗った。そして最後に銘を入れ、面は完成した。戸の開く音で文音は顔をあげた。疲れきった表情で父が現れた。

「出来たよ……」

村岡は弱々しい声で言い、面を見せた。見事な小面の面だった。

「父上……」

文音の言いたいことが村岡にはわかった。文音はこれでもう、何も思い残すことはないと思ったのだった。

姉小路良政が牛車と大勢の侍女と供を連れてやってきたのは、次の日の朝であった。

「面は出来たようだな」

姉小路は村岡の顔を見るなり、そう言った。村岡は紫色の布に包んだ面を渡した。包みをほどこいて面を見た姉小路は、思わず息を呑んだ。「見事だ。こんな見事な面は見たことがないぞ」

村岡はその言葉に対し、礼を言うかのように頭を下げた。姉小路は供の男に合図を送ると、その男は懷から金の包みを出して、村岡の前に置いた。

「約束の金だ。では、娘を連れていく」

文音は悲し気な表情で父を見つめた。

姉小路に促され、彼女は牛車に乗り込んだ。

「その方も婚礼に出席するか？歓迎するぞ」

姉小路がそう言うと、

「いえ……。ここで娘の幸せを祈りとうございます」

と、村岡は答えた。

「さようか。それでは、出発だ」

牛車がゆっくり動き出した。村岡は、一行が小さくなるまで見送っていた。

父と娘は二度と生きて会うことはなかった。

姉小路は途中で友人の公家の邸宅に立ち寄り、翌朝、京の都へ向けて出発した。数日かけて京の都に辿り着いた一行は、真っ直ぐに姉小路の邸宅へ向かった。文音は牛車からそつと京の都を見た。通りを大勢の人々が行き来し、賑いを見せている。都の様子に心奪われているとふいに牛車は止まった。姉小路の邸宅に着いたのだ。

「疲れただろう。今日はゆっくりお休み。明日は婚礼なのだからね」
姉小路は優しく声をかけた。侍女に案内されて部屋に入った文音は小さく溜め息をついた。明日の婚礼を考えると気が重い。もう、後へ引くことは出来ないのだ。

姉小路良政と村岡文音の婚礼は、次の日の夜行われた。邸宅の大広間には客が大勢つめかけていた。一足先に台座に坐っている姉小路は、客達の相手をしていた。

「妻になる女は面打師の娘だそうですな」

「ええ。美しい娘でしてな」

そのように話をしていると、盛装した文音が現れた。ざわついていた広間はたちまち、しんとまった。侍女達の手で化粧された文音の清らかな美しさに、誰もがみとれていたのである。文音は無言で姉小路の隣りに坐った。姉小路は出席した客達に次のように挨拶した。
「今宵は多くの方にお集まり下さり、誠に嬉しく思います。さて、皆様、わたしは夫婦の杯を取り交わす前に、能を舞いましょう。この晴れの日のために」

客達は姉小路が能好きなことは知っていた。中庭に特別に設けられ

た舞台に雛方が坐り、小面をかけ、唐織着流の装束を身に着けた姉
小路が立つ。笛の音が静かに流れ、三番目物

「井筒」

が始まった。「井筒」

とは、伊勢物語を材にとった世阿弥元清の作品である。

在原業平に別の愛人ができ、河内の高安へ通うようになった頃、夫
の身を案じた有常の娘は、

風吹けば 沖つ白波龍田山

夜半にや君が独りこゆらん

…どうぞご無事であるようにと、優しい心で詠んだ歌である。それ
から曲は進み、二人がまだ幼かった頃のことと語られる。互いに隣
家同士で、よくいつしよに遊んだものだが、いつしか成長して大人
らしくなると、男は女に恋歌を寄せる。

筒井筒 井筒にかけしまろが丈

生ひにけらしな妹

見ざるまに

女は返歌を次のように詠む。

比べこし 振分髪も

肩過ぎぬ

君ならずして誰かあぐべき

有常の娘は

「井筒の女」

とも呼ばれていた。僧は自分の前に現れた女は、有常の娘の亡霊で
あるうと思ひ、古寺に一夜籠ることにする。夜もふけ、さきほどの
女の霊が、今度は男装して夢の中に姿を現わす。

あだなりと 名にこそたてれ桜花
年に稀なる人を待ちけり

と詠んだのはわたし。そのために

「人待つ女」

と言われたのです。こうして業平の形見のものを身に着けて、業平になったつもりで舞いましょう。月の澄み切って明るい中、亡霊は静かな美しい舞を舞い始める。

月やあらぬ 春や昔の春ならぬ
わが身一つはもとの身にして

と業平が詠んだのは、いつの頃だったのか。

「筒井筒 井筒にかけしまろが丈」

と思い出の歌を口ずさみながら、女は舞い続けた。

そして、曲も最高潮に達した時、予想しなかった事が起きたのである。姉小路は妙に息苦しくなってくるのがわかった。動悸が激しくなり、目まいがした。見物していた客達や文音もこの異変に気づいた。姉小路の足取りはおぼつかなくなり、とうとうばったりと倒れてしまった。

広間は騒然となり何人かの者が倒れた姉小路のもとへ駆け寄った。

「姉小路さま！どうなされました！」

一人が面をそつとはずした。公家の表情はぐったりして、顔色は土色に変わっていた。

姉小路良政は死んでいたのだ。

「死んでいる…姉小路さまは死んでいる！」

これを聞いた途端、文音は広間を飛び出していた。姉小路は死んだ。死んだのである。

自分もいつそ死んでしまおう。どこをどう走ったのか。文音はいつ

の間にか足を止めていた。ふと顔をあげると桜の木がある。村はずれの丘にあった桜より、はるかに貧弱な木だ。

花はもう散り始めている。文音がじっと見つめていると、桜の木に重なるようにして、あの桜の精が現れた。

彼は優しく文音に問い掛けた。

「わたしといっしょに来るか？」

文音は目に涙を浮かべ、微笑みながら、

「行きます。どこへでも」

と、答えた。桜の精が手を差し伸べると文音はその手に自分の手を重ねた。

人々が文音を追ってきた時には、もう彼女の姿はなかった。ただ、目の前にある桜だけが前にも増して、花を散らしているだけだった。人々は姉小路が死んだのは、村岡が面に呪いをかけたのだと言いつた。武装した何人かが京の都から休まず、馬を飛ばして村へやってきた。荒々しく村岡の家に入り込むと彼らは呆然となった。

村岡一柁は自害して果てていたのである。

胸を短刀で一突きだった。村岡の冷たくなった表情は語っていた。自分は今まで色んな木で面を打ってきたが、この桜はこの世で最高の木だった、と…。

…何年かがすぎ、一人の村人が使いの帰りに桜の丘を通った。

そこで村人が見たものは、桜の切り株から萌え出ようとしている若芽の姿であった。

《完》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4882a/>

桜花幻奇伝

2010年10月9日13時22分発行